

---

# 大乱やみてのち、残念な少女たちのふる剣

眉村みこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

大乱やみてのち、残念な少女たちのふる剣

### 【Nコード】

N0596BA

### 【作者名】

眉村みこ

### 【あらすじ】

勇者アレスは魔王クヌプスを倒した。ヴァレンス国には平和がもたらされ、アレス自身もほっと一息、あとはふらふらゆるら暮らししていくだけ。そう思っていた矢先、彼の前で新たな物語が幕を開ける。魔王を倒した勇者を待ち受けていた、対魔王軍とのガチンコバトルより厄介な出来事とは！？「勇者の優雅なリア生活」の世界から一年前の時を描く、眉村みこ、書き手生活へのリハビリ作！ 乞わないご期待、乞う温かなご声援！ なお、このお話はこれ単体で独立独歩、がしゃこんがしゃこんと勇ましく動き回ります

ので、他の二作、「勇者の優雅なリタイア生活」「大魔王のまたいとこ」を読んでいただく必要はありません。

## 第1話「ことの終わり」

終わりは新たな始まり。

そういう陳腐ちんぷな言葉をアレスは認めない。

終わりは終わり。

おしまいである。

寝物語の終わりは安らかな眠りであり、もしも、その終わりが新たな物語の始まりだったとしたら、

「良い子がいつまでも眠れなくなっちゃうよ！」

ということになってしまう。

そんなことになったらどうなるか。良い子は睡眠不足になり、ふらふらの頭で学校に出かけたせいで勉強が身につかず、落ちこぼれ、そのせいでロクに禄ろくをもらえる職にもつせず、一生貧乏生活を送ることになる。

暗黒の未来予想図である。

そんなものを断じて許すつもりはない。

そういうわけでアレスは、物語の新たな始まりというものを一切認めないつもりである。

彼はつい先日魔王を倒すという冒険をまさに成し遂げたばかりであり、自分……というよりは一生冒険をするつもりなどなかった。

アレスは平和主義者である。

本来の彼には冒険心など微塵みじんもなく、家の縁側みじんで日がな日向ぼっこをしながら、可愛いあの子と寄り添っていられば幸せということなんとも気だるい男子である。十四歳。

それがひょんなことから、「勇者」などという役を務めることになり、「魔王」とやらを倒した。むろんのことアレスは、英雄物語で言うところの光り輝く「勇者」ではないし、敵もなにやら毒々しい感じのあの「魔王」などではない。「魔王」とは、畏れ多くもここヴァレンス王国で反乱の旗を掲げたクヌプスという男への蔑称へつしょうで

あり、それを倒す役をアレスが担ったことから、

「『魔王』を倒すのは『勇者』じゃね？」

というお軽い市民的ノリから、つけられた呼称が「勇者」だった。「勇者」アレスが「魔王」クヌプスを倒したのが、一週間ほど前のことである。

魔王の居城であるところのスタフォロン城を落とした。

魔王軍はそのほとんどが、ヴァレンス王都ルゼリアへと出陣しており、スタフォロンにはわずかな敵兵しか残っていないかった。ここに魔王も留まっていた。理由は明らかではない。

勇者を中心とした少数精鋭メンバーは、首尾よく城門を突破し、中庭から回廊へと鷲進し、最終的に王の間　クヌプスは王ではないのでこの呼称は正確ではないが、便宜的にそう言うておく　へと至った。

魔王クヌプスは、魔法の達人であり、一騎当千の猛者である。いつかのヴァレンス軍との戦では、自ら陣頭に立ち、その強力無比な呪文で、大いにヴァレンス軍兵士の肝に冷や汗をかかせた。永久に冷や汗をかけなくなった状態になった兵士の数も百をくだらない。

そんな猛将相手に数を用意しても仕方ないし、王都ルゼリアへの防衛に兵を割かなければならず、もともと数もいなかったしで、勇者パーティは五人で魔王に立ち向かった。五はヴァレンスにおける聖なる数である。

「五対一だつてよくよく考えれば卑怯じゃねえか」

と考える向きもあるが、さにあらず、魔王にも従者が数名つき従っており、数的な優位性は、アレス達にはなかった。

始まる死闘。

対魔王バトルは激戦を極めた。

勇者パーティは知恵と力の限りを尽くして戦った。

そうしてどうにかこうにか勝利をおさめたものの、アレス達の傷も深かった。仲間から死人こそ出さなかったがほとんど死に瀕した者もあり、もちろんそれでも魔王相手である、僥倖と言つべきだろ

うが、苦しみの声を上げる仲間を見ながらそういつお気楽な考え方ができるほどアレスはクールではなかった。

「オレはアツい男だからな」

アレスは誰にともなくつぶやく。

なにはともあれ、魔王は倒した。

反乱は治まり、一件落着。

落着はしたのだけれど、ただ、この反乱を収めたことに関して歴史的評価がどう下されるか、それはアレスには分からない。というのも、今回の反乱というのは、民衆による王制打倒という趣が如実にあったからだ。王とその腰巾着の貴族という特権階級への下からの抵抗。もしかしたらこれは成功させてやる方が良いのかもしれない、とアレスも実は反乱収め中に思わないでもなかったけれど、彼の置かれた立場がその思いを少しでも行動へと移すことを許さなかった。

事は終わった。終わったのである。終わったことをどうこう言っても始まらない、という潔い諦めを抱けるほどにはアレスは大人だった。大人でなければ、一団のリーダーなど務まらない。

事は終わった。

魔王を倒したのち、王都を攻めていた反乱軍が蜘蛛の子を散らすように撤退したのはすぐのことだった。魔王クヌプスはカリスマ的なリーダーであり、これを欠いてまとまりを持てるほどの精神的強さは反乱軍には無かったのである。

全てが終わったのだった。

終わりは新たな始まり。

くだいようだが、アレスはその言葉を認めない。

ただし、アレスがある言葉を認めないからといって、その言葉通りのことが起こらないのかというと、もちろん、そんなことはないのである。

## 第2話「開幕ベル静かに」

アレスは今のんびりと石畳の街道の上、馬車を走らせている。

空はどこまでも高く高く、青く澄み渡って雲のかげらさえ無い。

バーサス魔王戦というラストバトルから一週間が経過していた。

傷ついた仲間の看病をするためと王都を攻めていたクヌプス軍の動向を見守るため、この一週間はスタフォロン城内に滞在していた。

そこへ王都帰還の命が王より下されたのである。と言っても、王は現在病床にあり、代わって政務を執とっているのは王女であるので、実質的にはその王女からの命であるが。

「帰って来てください」

その命は、速やかに反乱收拾の第一功労者を賞し反乱の終結を宣言することによって、国の体裁ていさいを良くするのが目的である。

仲間のなかにはまだ満足に動けない者もいる。王女からの帰還の命はできるようなのであれば全員、難しいようであれば勇者一人でもというものだったので、アレスは、傷ついた仲間とその看護のメンバー、すなわち自分以外の全員を残し、一人スタフォロンを出た。残していく仲間に後ろ髪を引かれる思いのアレスであったが、王女の命を無下にするわけにはいかなかった。

「ああ、ひとりはいやだなあ。みんなと一緒にだったらどんなにいいか……」

御者台の上で、アレスは呟つぶやきをもらした。

枯れて落ちそうになった葉のついた枝をさわさわーと揺らす秋風のような、いかにもさびしげな声である。

それはただ今の好天にまったく似つかわしくなかった。  
すると、

「ひとりとはどういうことだ。わたしは数に入れられていないのか？」

すぐ隣から、呆れたような声上がる。

アレスは隣を見たりしなかった。それが目の保養となるような美少女でもあれば話は別だけれど、二十歳がらみの男を見たってしようがない。なので、前を見ながらぞんざいに答えた。「うん」と「つれないな。これから長い旅を続けることになるというのに。あの意味では伴侶と言ってもいい存在であるのに」

隣からの声は微笑を含んでいる。

「気色悪いこと言うなよ」とアレスは応戦した。「オレが伴侶にしたいのは、感じのいい優しい女の子だ」

「当てがあるのか？」

「ない、全く」

アレスはきつぱりと言った。しかし、そのあとに、

「でも、オレみたいがいい男にはそういう子が見つかるはず!」  
と、これもきつぱりと言いつつ切った。

「一カ月お前と付き合って得たわたしの勘によると、お前にはどうもそういう子は見つからないような気がする。アレス」

「ええっ!」

アレスはびっくりして、隣を見た。

豊かな銀髪を無駄に日の光にぴかぴかと輝かせた青年が口の端<sup>は</sup>を少し上げている。

「前を見て運転しろ。アレス」

「えー、なんだよ、ズーム。お前、もしかして、そういう能力があるの?」

アレスは言われるまでもなく進行方向に視線を戻しながら、訊いた。

「そういう能力とは?」

「予知能力的な」

「勘だと言っただろう」

「勘か……変な勘を持つなよ!」

「変と言われてもそう感じたのだから仕方あるまい」

「じゃあ、その勘で、オレにはどうという女の子が見つかりそうだった。」



て感じたわけ？」

「ふむ」

ズーマは意味ありげに沈黙考した。

街道脇にそつとたたずむ白い花が、そよ風に楽しそうに揺れている。

「厄介な女の子が見つかるな」

「厄介？」

「ああ」

「『厄介』ってどんなんだよ」

「トラブルメーカーだな。トラブルにお前を巻き込む素敵極まる女の子だ」

「どこがステキ！？　トラブルなんて御免だね。オレはまったり暮らしたい」

「それではわたしが面白くない」

「オレはお前を楽しませることまでは約束してないからな」

「なるほど、確かに。しかし、結局はそうなるだろう。わたしの勘は良く当たる」

ズーマは低い声で言った。

次の瞬間、突然びゅうつという強い風が吹いて、アレスの黒髪をはちやめちゃにした。

アレスは、手ぐしで髪をなでつけながら、不気味そうに隣の青年を見た。

「嫌な風だったな、アレス。何か起こりそうだ」

ズーマがすかさず言う。

「なにを、何かの前振りみたいなセリフ言ってんだよ！　新たな魔王とか、そういうの要らないからね！」

「魔王で済めばいいがな」

「魔王より厄介ってどんなんだよ」

「そんなものはいくらでもあるがな。単に殺し合いをすればいいだけの問題など実は取るに足らないものだ」

「オレとみんながこの半年やってきたことを過小評価するなよな！」  
そうツッコミはしたものの、アレスはズーマが言ったことを心底では認めていた。この世には、もっと厄介なことが色々とあるのである。十四年しか生きていないアレスでも、すでに一つ二つはそういうものを経験済みだった。

そうして、そんなアレスの前に、魔王バトル以上の厄介事を経験するチャンスが、再びか三度かみたひは分からないが、今まさに迫りつつあった。

「前から馬が来るようだな」  
ズーマが言う。

なるほど、彼の言うとおり、前方からひとつの馬影が近づきつつあった。もちろん、馬がひとり（一頭）で気ままにお散歩しているわけではなく、騎乗している人がいる。軽快に疾駆してくる様子から、乗り手が中々の腕であることが分かる。

アレスは馬車を停めた。

### 第3話「再会の仲間」

アレスが馬車にブレーキをかけたのは、感じたからである。なにやら怪しげな鬼気とでも言うべきものを、前から来る人馬から。

それに備えるために、馬車を止めた。

魔王戦が終わりハッピーエンディングを迎えたからといって、勇者アレスの心に油断は無い。遠足は、家に帰るまでが遠足である。せつかく魔王を倒したのに、それに浮かれて帰りの道中で石にでもけつまずいて頭を打って大地に還ってしまったら、目も当てられない。まだキュートな女の子といちゃいちゃもしてないのに！「家に帰るまでオレは油断しないし、絶対に可愛い子と知り合ってみせる！」

アレスは心をあらたにして、馬が近づくのを待った。

案の定である。

馬はアレス達の少し手前で止まった。

鹿毛かげの美しい馬だったが、その乗り手はさらに美しかった。

アレスと同じ年ほどの少女である。

馬から降りてアレス達に近づいてきた彼女は、すらりとした肢体と烈火のような赤い髪、薔薇色に上気させた頬を惜しげなく日の下にさらしていた。少女は、土色の旅装であったが、まるで沐浴直後でもあるかのような清新さの中にあっただ。

少女が立ち止まる。

アレスは、彼女の翡翠色に輝く目をじっと見つめた。すでに御者台から地面に降りている。御者台に座ったままでは変に応ずることができないからだ。そうして、アレスの手には剣が握られていた。もちろん、鞆におさめられた状態である。勇者たるもの、いきなり抜き身の剣で人に向かうような酒場のチンピラ然としたチキンぶりを見せつけるわけにはいかない。その剣の他に、マントをはおった

アレスの背には、もうひと振り剣がある。

「さて、見知った顔だが、ここまでわざわざ出迎えに来てくれた様子でもなさそうだな」

御者台を降りてアレスの隣に立っていたズーマが、面白そうな声を出す。

少女は知り合いだった。単なる知り合いというだけではなく、この反乱を共に戦った仲間である。ラストバトルには参加しなかったけれど、今回の戦いを力合わせて乗り切った一人。名はコウコ。

「今は王都にいるはずだけどな」

そうつぶやいたアレスは、この反乱中に何度も嗅いだにおいを感じて、顔をしかめた。

そうして、すぐにでも剣を抜きたくなかった。もうチキンがどうこうとか勇者の名誉に関する話などどうでもいい気分である。

というのもアレスがかいだにおいとは、腐臭　血と肉、すなわち死の臭いだったからだ。

仲間の少女と会って、なぜそんな臭いが漂ってくるのか。日なたの匂いとか、花の香りとかならともかく。訳が分からないアレसだったが、その訳のわからなさに向かい合えるだけの意志の強さを備えている。

ただし、もちろん、一緒に向かい合ってくれる者がいれば、それに越したことはない。

隣にいたズーマがすすすつと離れようとしたところを、アレスは逃さなかった。

「なにをする？」とズーマ。

「それはこっちのセリフだ。どこに行くつもりだよ」

アレスは、まるで人見知りの子どもがお母さんにするように、ズーマの服の裾をしっかりと手で握っていた。

ズーマがアレスの手を引き放そうとしながら言う。

「離れて見物しようと思っただけだ」

「オレたち一心同体だろ」

「いや、二心異体だ。放せ。せつかく面白い見物になりそうなのだ」  
「誰が放すか！？ 見物役になんかせねー！！ 絶対にお前も巻き込んでやる！」

アレスとズーマがごちゃごちゃやっているのを、少女は冷えた目で見ていた。

アホくさいかけあいをしている最中にも、アレスに油断はない。いや、むしろ、相手の油断を誘おうという意図を若干は持っていることを、彼の名誉のために付記しておく。アレスは注意深く少女の一挙手一投足を心の目でじっと見つめていた。そんなことをするくらいなら、相棒としゃべくるのをやめて肉眼で見ればいいのという批判もあることだろうが、その批判は正当であると言わざるを得ない。

アレスとズーマはしばらくの間ぐだぐだとやっていたが、やがてアレスの手はズーマの服から離れた。

ズーマはすかさず一声放った。

その言葉は、今はもう日常生活には使われていない古い古いものである。

声と同時に、ズーマの体はふわりと宙にいた。そのまま、すーっと馬車の屋根まで浮かんで行ったズーマは、屋根に腰を落ち着かせた。魔法である。それから長い脚を組んで、アレスと少女見下ろした。まさに高見の見物である。

アレスはその様子をうらめしげに見上げてから、そろりと少女の方に目を向けた。どうやら彼女にはひとりでするしかないらしい。アレスは覚悟を決めると、一つこほんと咳払いをしてから、

「よ、コウコ！ お久ー！」

快活な声と手を上げた。

それは、なにやら薄暗い雰囲気吹き飛ばそうとするためにことさらに為したものだだったので、わざとらしいことこの上なかった。

少女は無言で、右手を左腰のあたりに差し入れた。

まるで髪を直すかのような自然な仕草である。

すると、少女の手が出現させたのは、見事な白刃だった。

#### 第4話「兎を狩る獵犬を狩る者」

刃を持った立ち姿は、まるで芝居のキメポーズのように綺麗だった。

そうして、芝居だとしたらこれから悪人がばっさばっさと斬られてしまう見せ場となるわけだが、現実に自分でそういう悪人役を演じたくないアレスは、念のため一步下がることにした。

一步下がったって別に悪いことはない。そうしたところで、彼女との距離は十分に声が届くほどの近さであることだし。念には念を入れて、アレスはさらにもう一步下がっておくことにした。用心のためである。虚勢を張るのは匹夫の勇。勇者の勇とは細心の上に成り立つものなのだ。

「魔王を相手にして一步も引かなかった勇者が二歩下がる」

頭上からかうような声が降ってきたが、それに応じている時ではない。相手はすでにこちらへの害意で満ち満ちているのである。刀の先を向ける友好の挨拶などというのがあれば話は別であるが。

「で、どういっつもりだよ、コウコ？」

アレスは、問い質した。彼女は仲間である。まずは訊くべきだろう。仲間に剣を向けられても仕方ないような背徳的行為をした覚えはない。

「そりゃあさー、ちょっとはいやらしい目で見たりとかしたときがあったかもだけど、仕方ないだろ！ オレは男なんだから！」

アレスの冗談に、少女は全く反応しなかった。

アレスは無駄だと分かっているも冗談をやらすには済まないこの素敵に残念な性格を愛してくれる女の子がいつか現れないだろうかともやもや考えたあと、いたらいたでそれもなんだかなあ、と思っ  
てしまつて精神の袋小路に迷い込み、テンションを下げた。

「恨みは無いわ」

少女の声は風に鳴る風鈴のように清爽とされていたが、

「けれど、お前をルゼリアに帰すわけにはいかない。ここで死んでもらう」

口にした内容はさわやかさとは対極にあるものだった。少女の足が地を蹴る。

アレスは二歩下がっていた自分の用心深さを心の底から称賛した。そのおかげで、抜刀して相手の刀を弾くまでの時間が十分にあった。ぎいん、と鋼が撃ち合わされる音が空気を揺らす。

「どういうつもりだよ、コウコ！」  
十字に重なった剣と剣越しに、アレスは少女の目をにらんで言った。

少女は艶のある口元を静かに開くと、

「ヴァレンスのためだよ」

それだけ言っつて、つばぜり合いをしたまま力任せにアレスの体を押しした。

押し負けることは分かっている。

同じくらいの体格の女の子に力で負けるといのは悔しいことこの上ないが、そんな安いプライドにこだわっていると、高い命を失うことになるのが目に見えているので、アレスは押された反動を利用して、自分から後ろに跳んだ。

そこへ、風を巻いて少女が迫る。

振られる刀。神速と言っつてよい動きだが、アレスは反応している。肩口に横なぎに襲いくるそれを自分の剣で受け止める。少女の細腕のどこにそんな力があるのかさっぱり分からないが、とにかく重たい、重すぎる一撃である。以前、陸上で最強の獣であるリーグルと戦ったときにその前肢の一撃を剣越しに受けたことがあったが、それと大差ない。そう言っつたらさすがに言い過ぎではあるけれど、それほど過ぎもしないような気がするアレス。

少女というよりは、もはや可憐な容姿をまとった化け物である。つまり外見と内面が全然別物。

不安定な体勢で一撃を受けたアレスは、力を受けきることができ



ず横に飛ばされた。ごろごろと地面を転がされたが、頭は冷えてい  
る。すぐに立ち上がると、追撃は無い。代わりに、真正面にコウコ  
の姿。彼女は、長剣を構えたまま端然としている。よくよくと見れ  
ば剣は反りのある片刃。こちらはアレスからは見えないが、その刃  
には炎のような紋様が浮いていた。

ヴァレンスの……何だって？

アレスは少しできた間まに考えた。

確かヴァレンスのためだと言っていた。しかし、まさにそのヴァ  
レンスのために、アレスはこれまで働いてきたのだった。もちろん、  
ヴァレンスとはこの場合、ヴァレンス王や貴族のことを指している  
わけだけれど。

実際はアレスはそういうヴァレンスの支配者階級のために働いて  
いたわけではなく、もっと個人的な目的で動いていたわけなのだけ  
れど、しかし、彼の働きが客観的にヴァレンスのためになったこと  
は誰にも否定できるところではない。

「それなのに何で殺されなきゃいけないんだよ！」

アレスは憤然とした声で言った。

しかし、心は水のように澄んでいる。このくらいで取り乱すよう  
なヤワな人生は送っていないのだ。

「ずるがしこいウサギがいなくなると、それを狩る猟犬は必要がな  
くなる」

言ったのは、コウコではない。ズーマだった。

アレスは、ふうと息をついた。

ずるがしこいウサギ（魔王）がいなくなったので、それを狩る獵  
犬（勇者）は必要がない。必要が無いものを生かしておくのは無駄  
である。無駄は排除するに限る。そういう分かりやすい理屈。実に  
シンプル！

アレスは納得した。

納得せざるを得ない筋道。

納得はしたけれど、アレスがすっかりした気持ちにならなかった

「よは言ひまじまない。」

## 第5話「覚悟は瞬時に決める」

必要が無くなつたから捨てる。

不用品扱いされたアレスの上から、

「しかし、アンシの意志ではないな、おそらく。君の独断か、コウコ。それとも、ヴァレンス上層部の意志か」

ズーマが続けた。

アンシというのは、かしこくもヴァレンス王女の御名<sup>みな</sup>である。それを呼び捨てにして口に出せるといことが、ズーマの怖いもの知らずの一端を表していた。そうして、おそらくはズーマに怖いものなど皆無であろうということを、アレスは知っている。

ズーマの問いにコウコは答えない。彼女はただ、アレスを見つめるだけである。

王女の意志ではないだろう、とアレスも思う。というのも、仮に王女の意志であつたとしたら、この事態は拙劣に過ぎるからだ。

もしもオレを殺したいとしたら……。

そんな想像を平然とできるところが、アレスがいかに冷静であるかを物語っている。想像はできるが、いい気分でないことはもちろんである。

想像の結果は、もしも王女が自分を殺したいとしたら、何食わぬ顔で王宮に呼び寄せて、そこで捕殺するだろうというものだった。それが一番簡単である。アレスは、のこのこと王女の御前でかしまつた自分が、武装した兵に周囲を固められる図を思い描いて、ぞつとした。そういう可能性を今の今まで一度も考えなかつた自分の迂闊<sup>うかつ</sup>さに腹が立ったが、凱旋<sup>がいせん</sup>した勇者が王女によって捕えられる可能性を考えるなどというのは無茶苦茶であつて、アレスは誰からも非難されることはないだろう。

王女の意志でないとしたら、誰の意志か。

アレスは一応コウコに尋ねてみたが、答えは返って来なかつた。

返されたのは氷のように冷たい視線だけである。

まるで、その視線でもってアレスを突き殺そうとでもいうかのような鋭さだった。

アレスは、同じ見つめられるにしても、恋するまなざしで見つめられたいもんだと切実に思った。

「で、どうするんだ、アレス。大人しく殺されてやるのか？」

ズーマの声は、大きく張り上げているわけでもないのに、やたらとよく響く。

「魔王を倒したつてのに、仲間に殺されてたまるかつ！」

アレスは強い声で答えた。

声は強く張り上げたものの、これはなかなか不利な勝負である。殺意を抱いてかかってきた者を「仲間」と呼ぶところにアレスの甘さがあり、しかもそれが女の子であるということになると、

「女の子はガラス細工のように繊細！ 取り扱い嚴重注意！」

との教育を師や姉弟子から嫌というほど受けてきたので、自然と女の子に対する時にはソフトになってしまつのである。

それでも実力差に大きな開きがあれば別であろうけれど、目の少女が自分と同程度の實力を持つていることをアレスは知っていた。そうして、同レベルの人間を抜き身の剣で傷つけず制すなどということはずもって無理。

とすれば、なすべきことは一つしかない！

アレスは決断の男である。

彼が速攻で決めた作戦とは、

「三十六計逃にぐるに如しかず」

アレスが唯一覚えている兵法へいほうだった。

つまり、すたこらさっさーと逃走するのである。

いやいや、てか、ちよつと待てよ……。

どこへ逃げようかと考えて、当然仲間の元であるという結論に達した時、そこから想到した事態にアレスは慄然りっせんとした。そうして、自分一個のことなどよりもまずその点に思い至らなかつた不明を深

く恥じた。全く心乱れていないように思われてちよつとは慌てていたのか、あるいは単なるアホか。後者だとは思いたくないアレスである。

思いついたことを確かめようとする前に、少女によって突きつけられている刃のその先が不意に大きくなった。

コウコの突き。

アレスはのど元へと伸びあがるようにして向かってきた剣の切っ先をかわした。かわしたけれど、首の皮がこそぎとられたような気がする。アレスは、交わしざまに切りつきたい気持ちでいっぱいだったが、どうにかこうにかそれを押さえて地を蹴った。

距離を十分に取ってから、アレスが訊く。

「おい、コウコ！ 刺客はオレにだけか。それとも、スタッフオロンにも送ったのか？」

魔王を倒したメンバーはアレスだけではない。勇者は一人ではなく、パーティなのだ。確かにアレスは中心人物であるけれど、だからと言って他のメンバーは軽視されてしまうような小さな存在では全然無かった。客観的にも、アレスの心情的にもである。

不要になった猟犬は他にもいるのだ。

とすれば、そちらにもコウコの人物が送り込まれている可能性があるがある。

やすやすとやられるような可愛い仲間では全然無いが、今は手負いの身である。いつもなら万が一の可能性も今なら万が百くらいになっっているかもしれない。

「これから死にゆく者に教えても仕方がない」

それがコウコの答えである。

アレスは、なるほどそれもそうだな、と思った。

そうして、自分の感傷と仲間の命を天秤にかけた。

後者の皿がすぐに傾く。

アレスは、覚悟を据えると、持っている剣をポイッと捨てた。

コウコが怪訝な様子を見せたかどうかは、アレスには分からない。

剣をなくしたアレスの手が、自分の背に回り、もう一つの剣の柄を握った。

## 第6話「勇者の奥の手」

ぎゅつと柄を握りながら、アレスは古い魔法の言葉を唱えた。

「『左の手と右の手を以つて貫く木を取り外す……開け！』」

それは、背の剣の封印を解く呪文である。剣には魔法の錠がかけられており、鍵となる呪文を唱えないと、鞘から抜けないようになっている。そのように使用者を制限するということは、それだけ強力な力を秘めているということである。

背から引き抜かれた剣は、さびついてでもいるかのような汚れた赤色をしていた。刀身の中央には、古の言葉が刻み込まれている。

何かをかたどったかのような象形文字だ。今はもう使われていないむかしむかしの文字である。

剣は、魔法の力を帯びた強力なものであり、魔王クヌプスとの戦いで使用された武器だった。この剣のおかげで勝てたと言えばそれはさすがに自分と仲間の力を卑いやしめることになるけれど、この剣の力が、勝利のための一助になったことは事実である。

そんな凶器を、仲間だと思っていた、しかも女の子に向けなければいけないとは！ アレスにはやり切れない情があるが、しかし、やり切るしかないのが今の彼の立場である。

ここからただ逃げることはできない。逃げれば当然コウコは追いかけて来るだろう。どこまでもどこまでも。それは、アレスが逃げ込む先、すなわち仲間の所まで暗殺者を連れていくということに他ならない。

戦うしかないのである。

かと言ってアレスには、コウコと血みどろの殺し合いをする気はやはり無い。

しかし、そもそも殺しまでする必要は無いのである。

要は彼女を戦闘不能状態にして追って来させなければいいわけで、それは普通は、殺すことよりも難しくなるわけだけれど、背中の剣

ならそうということが簡単に……とはいかないまでも、かなり確実にできるはずだとアレスは踏んでいた。

アレスは通常、呪文を使うことはできないが、この剣の力を借りれば使うことができる。その魔法で、コウコを制するというのがアレスが考えたことだった。ちょうどいい感じの捕獲用魔法がある。

ただ一つ、問題があるんだけど……

アレスは、コウコを見据えながら呪文を唱えた。そうして、拳大の魔法の雷球を宙に出現させた。触れるとビリビリっとして、体を麻痺させる効果がある。非常に便利極まりないものなのだけれど、ここで一つ問題が発生する。

というのも、発生した雷球は一つではなく、二つでも三つでもなく、数十個はあるからだ。一個でも十分に成人男性を昏倒させられるところそんなに当てたら、シヨック死してしまうだろう。

アレスの剣は、城門をぶちこわしたり大地を割ったりと、派手なことは得手なのだけれど、ちょこまかとしたことは不得手である。満天の星のようになって現れた雷球を周囲に感じながら、アレスは、はたして剣で斬り合うよりもマシなのかどうか自信が持てなくなった。なので、自分の判断を信頼する代わりにコウコの実力を信頼することにした。

上手く避けて、一二個だけ当たってくれ！

アレスが剣先をコウコに向けると、雷球が豪雨のようにコウコに降り注いだ。その豪雨に少しだけ濡れることを期待するのだから、アレスのコウコへの信頼は大層なものであると言える。

そのコウコが立ち止まっているのを見て、アレスは眉をひそめた。少女は相変わらず刀をゆるやかに構えたまま、微動だにする様子がない。このままでは、雷ボールに滅多打ちになってしまうにも関わらず。

「……弾け」

アレスの耳が、コウコの声をとらえた。

それは先ほど自分が唱えたのと同種の言葉だった。



呪文である。

太古の言葉に応じてコウコの刀が鈍い光を放つ。向かい来る数十の雷球を見据える彼女の瞳は澄みきっている。

大きく振り下ろされた刀は、続いて振り上げられた。それはほんざいな一振りのように見えただけで、彼女に向かつて当たるハズだった魔法のボールは、綺麗に消失し、あるいは弾き宙や地に散らした。

「げえ、まじかよっ！」

アレスはまともにも驚いた声を上げた。

事が終わったのち、コウコは事が始まる前と変わらぬ静けさの中にいた。

数十のビリビリ弾は、彼女にかすり傷一つ与えていないようである。

アレスが驚いているその虚をつく格好で、コウコが飛び込んだ。

しかし、アレスに虚は無い。声は上げてても、心は明鏡止水、澄みきっている。

振られたコウコの剣を受け止めて、弾き返す。

「強すぎだろ！ ふざけんな！」

そうして、距離を取る。

コウコの剣術はちまちま振るようなものではなく、一撃必殺を旨としているようで、連続して振られることがあまりない。その場にとどまるコウコに、

「てか、オレより強くねえ？ お前が勇者になれば良かったのに！」

アレスは本心から言った。

そうして、無視された。

ターゲットと会話を楽しむ趣味はあちらには無いらしい。

「さて。盛り上がって来たな」

ズーマが心底楽しそうな声を出すのを、アレスは心底から憎いと思った。



このクソヤロウ！　ズーマ」

アレスは思い切り声を上げた。

もちろん、目はコウコに向けたままである。

コウコの翡翠の瞳は、まるで何物をも寄せ付けない険峻な山の頂いただきのように鋭く尖っていた。

アレスはごくりと息を呑んだ。これで圧倒的な不利に立たされたわけである。打開策は無い。

そのとき、コウコの口元がかすかに動いた。「……惚れたって？」  
そうして、小さな声が漏れる。小さくはあるけれど、十分に聞こえる音量だった。それは、コウコとあまり離れていない　コウコはアレスを一太刀で斬れる位置までじりじりと近づいている　と  
いうこともあるが、なにより、コウコ自身に問いかけの気持ちがあったからである。

アレスはその気持ちを聞き取って眉を寄せた。

「こいつはキミに惚れているのだ。コウコ」  
耳ざとくズーマが言葉を継ぐ。

適当なことを言いやがって！

と憤慨する気持ちを、しかし、そのまま言葉には出さないアレス。  
「出さない」のではなく、「出せない」ではないかという意見を言うヤツに対しては、とりあえず蹴りを入れてやりたい気持ちがあるアレスだったが、その蹴りには必要以上に力がこもってしまうかもしれない。

コウコは無造作に一步、足を進めてきた。それがあまりに無防備であったので、その行為はアレスの警戒心の外にあった。もしそのとき彼女に攻撃する意志があったら、簡単に斬られていたに違いない。

「本当なの？　わたしのことが好きなの？」

突然に口がなめらかになったコウコが、続けて言った。構えは解いており、刀の先は下を向いていた。

なめやがって、オレからは攻撃しないと思ってるのか！

しかし、それは当たっていた。

「本当だ」

そう答えたのは、アレスではない。

ズーマがやたらと力強い低音で言ったのだった。

アレスは押し黙っている。

「沈黙は肯定の証」

これもズーマ。

コウコはさらに一歩近づいてきた。

それは完全に互いの間合いの中である。

凶器を一振りすれば互いの命を奪える空間。

「それで、アレス？」

「ん？ 『それで？』 って何だよ」

「答えて。わたしのことが好きなのかどうか」

「今そんなこと話しているときじゃないだろ。オレたち戦ってるんですけど！」

「小休止にします」

「戦ってる最中に小休止！？ 何言ってるの！ 聞いたこと無いよ。」

「そんな話！」

「今聞いた」

「うん、聞いたね……って、オイ！」

コウコはまっすぐにアレスを見た。

アレスはいたたまれない気持ちになった。そうして、もしこの隙を取らえられて斬られたら間抜け中の間抜け、輝ける間抜け王として、ヴァレンス史上に燦然とその名を輝かすことになるだろうと思っただ。

「……別に」

「別に？」

「別にお前のことなんか好きじゃねーし。ブース！」

ブスという言葉が、鳥の鳴き声のように空に長く響いた。

そうして、その響きに重なる音が無い。

静寂。

静寂。

また静寂である。

「どこの子どもだ、お前は」

という当然予想されたズーマのツツコミも降らない。

アレスは、外したことを悟った。そうして、命の取り合いの場でもユーモアを忘れないこの大人な態度を地の神よご笑覧あれ……いや、間違えた、ご照覧あれ！ と心の中で叫んだ。

「ヴァレンス王族の血に平民の血を混ぜるわけにはいかない。だから、殺すしかないのよ、アレス」

静寂を破ったのはコウコである。

アレスは、艶っぽい話から解放されてとりあえずホツとしたが、よくよく彼女のセリフの中身を吟味してみたところ、

ホツとしてる場合じゃないよ！

ということに思い至り、とりあえずすり足で、コウコとの距離をあけた。

コウコと話している今の間、アレスはずっと剣を構えっぱなしであった。

## 第8話「王の約束」

「魔王を倒し反乱を収めた者を姫の夫とし、国を継がせる」

王がそう宣言したのは、クヌプス反乱軍が王都ルゼリアまでひしひしと寄せてきたのを、どうにかこうにか撃退した直後のことである。このあと、アレスたち勇者パーティはスタフォロンへとひた走ることになる。

王の宣言は、反乱收拾の賞を保證することによって自軍の士気を上げようとするという実際的な意図の他に、己の大切な物を差し出すことによつて大地の神に願いを叶えてもらおうとする宗教的な意図もある。すなわち、娘と国という相応の犠牲を差し出すことによつて、大地の神に命を守ってもらおう。それは王自身の命だけではなく、ルゼリア都民全体の命ということである。ちなみに、民衆による王制打倒という趣の中でも、王都都民は王室の味方であり反乱軍に与<sup>くみ</sup>することは無かった。仮にルゼリア都民が反乱軍に呼応していたら、この反乱は確実に成功していただろう。

魔王を倒したのは決してアレス一人の力ではないし、かといって勇者パーティだけの力でもない。ルゼリア防衛のために剣を振るつた者や、更にはその防衛をバックアップした者まで全てを含む。であるので、「反乱を収めた者」と言っても誰になるのか、厳密に決めることは難しい。

しかし、いやしくも王の言葉である。難しいのでできませんなどという理屈は通らない。しかも、ヴァレンスという国は非常に言葉を重んじる国なので尚更<sup>たがひ</sup>である。言葉を重んじるのは、どの国でも同じかもしれないが（そうでない）、約束というものが成り立たなくなってしまう）、ヴァレンスでは特別そうである。言葉に出したことというのは地の神が聞いており、それは神との誓約なのだという意識を一般市民までもが濃厚に持っている。まして、王であればそれはなおさらということになり、王が口にしたことというのは単

に「為政者の言葉は守られなければならない」という政治的な意味以上の意味を持っている。

王の言葉の実質的解釈が難しいとすれば、形式的解釈として、魔王を直接倒したのは勇者であるので、王女の結婚相手は自然、勇者ということになる。

アレスは今の今までそんなことを全く考えていなかったことに気がついた。王女との結婚なんて想像だにしたことない。もちろん、王の宣言それ自体は知っていたが、ピンときた話ではなく、自分に結び付けて考えたことなど一度もなかった。

「つまり、お前は結婚を阻止するためにここに来たってことか。花婿候補が死ねば、そりゃ結婚なんてできないもんなあ。いやあ、子どもでも分かる理屈だね……って、オイ！」

アレスの一人遊びに、コウコは応えない。

彼女の代わりに、

「それにしても、思い切ったことをするものだ。どこの誰かは分からないが、まさか王が言葉にしたことを破ろうと画策する者がいようとはな。地の神を畏れる者が王宮から減っているということか。全く嘆かわしい」

感心二割、愉快さ八割の口調で、ズーマが口を出した。悲嘆の調子はゼロ。

「神聖にして侵すべからざるとかしきヴァレンスの血脈に小汚い緑色の血を混ぜ合わせるわけにはいかないというのは分からない話ではないが、そのために王の誓約を破るわけだから理屈に合わないな。いやむしろ、神との誓約の方を優先すべきであって、ヴァレンス王家の血脈などに比べたらさしたるものではないというのが普通の考え方だと思うがな」

ズーマの言葉に皮肉は込められていない。

コウコが言った「王女と勇者の結婚阻止」のために、今のような事態に至ったなどということは信じていないのだ。

それはアレスも同じだった。

やはり、ズーマが初めに言った「不必要になつた粗大ごみ処分」  
説の方を信じていた。

であれば、コウコがなぜ「結婚阻止」などということを出したのか、その説明がつかないことになるが、真相がどうであれ、とりあえず現状を打破し生き残る必要がある。殺されかけた真相に興味を持つのは生きている人間であつて、死人は自分が殺された真相がどの説であつてもそれほど興味は持たないであらう。

とはいえ、その現状打破とやらをどうやって行つか。それが大問題である。

「手を貸してやろう」

不意に声が耳元で聞こえた気がした。

アレスがその声に対して、「余計なことすんな！」というセリフの「よ」を言い出そうとまさに口を開きかけた瞬間に、

「もしも、アレスを殺すのがオージンの遺志だとすれば、ナメた話だがな」

それを遮るかのように、ズーマが声を出した。

声量豊かな無駄にいい声である。

オージンとはヴァレンス王の名である。  
すると、

「……まだ死んでないわ」

コウコが、初めてズーマに反応した。

単に反応しただけではない。

その瞳に感情的な炎がごうごうと燃えている。

ズーマは、ふつと笑うと、

「残念だがもう死ぬだろう。君はこんなところで遊んでいるより、王のそばにいたほうが良いのではないか、コウコ。臨終の席に立ち会えなくなるぞ」

嘲るように言った。

次の瞬間、コウコの口元から呪文の声が上がった。



## 第9話「相棒の微妙なサポート」

コウコの薄紅色の唇から、なにやら音楽的な声が上がるのを、アレスは傍聴していた。

なにせ自分に向かって唱えられたものではない。

しかし、フェイントということも考えられる。ズーマに向かって見せて実にはアレスに攻撃するというような一応警戒はしていた。

先ほどアレスの呪文を防いだときの一件といい、コウコは大した魔導士である。

いい感じに魔法を使えるんだなあ。

アレスは戦闘中であるにも関わらず、すぐれて牧歌的な感想を持った。

コウコが魔法を使えることは知っていたが、それほど大したものだとは思っていなかった。一緒にパーティを組んで戦ったこともあるけれど、そのときに彼女が使った魔法はかなり小規模のもので、本人も、

「魔法とは相性が悪いのよ。刀を振る方が簡単」

そう言っていたのである。

コウコの声が止まった。

同時に彼女の手にする刃がギラギラと光り出す。日の光を受けているわけではなく、自ら輝いているようだ。魔法の光である。非常に禍々しい輝きであるようにアレスには思われた。そういう直感には自信があるアレスである。

刀を持って、コウコが走り出す。

アレスはそれをぬぼーっと傍観していた。

コウコが向かったのは、ズーマのところである。ズーマは客車の屋根部分から相変わらず眼下を睥睨している。客車のちょうどズーマが座っているところの下にあたる部分に向かって行ったコウコは、

光の刀を思い切り振り下ろした。そこには、客車のドアがある。

直後、爆音が上がリ、客車部分はドアもろとも綺麗に大破した。ドアの部分を中心にして、客車がまるで、大口を開けた子どもにかじられた柔らかい果実でもあるかのように、天井まで無惨むげんにえぐり取られている。外から内部のソファがあらはに見えた。

客車を引く二頭の馬が、自分たちの後方でただならぬことが起こったことを感じて、ひひひーんと鳴き声を上げた。

すらりとした刀で、客車を斬る。

そんなことができるのはもちろん魔法の力である。

それもなかなか強力な。

魔法とどこが相性悪いんだよ！

幼なじみ同士みたいにぴったりじゃねえか、とアレスは思った。

そうして、女の子はウソをつく生き物であるという普遍の真理を再認識した。

「礼はいいぞ、アレス」

「いいも何も言う要素が見当たらない」

「勝ち目を作ってやっただろう」

「勝ち目？ なんかいよいよ無くなってきたような気がするんですけど」

「お前の目は節穴ふしあなだな。だから、勝利もその目から抜けていくのだ」

「面白いね、そのしゃれ。笑えないけど」

客車大破の瞬間まで、その客車の屋根にいたはずのズーマがいつの間にか自分の後ろににいることについて、アレスは何もつつこまなかつた。ズーマも何も説明しない。そういう二人の以心伝心的関係が、アレスにはとてつもなく残念だった。

「なんでそういう関係になるのが女の子じゃなくてお前なんだろうな。ていうか、せめてお前が女だったらなー。お姉さんのなさあ」

「妄想は後でいくらでもしろ。今は現実に戻れ」

アレスは言われた通りにした。ズーマの言葉に素直に従った形になつたわけだが、別にいい子ちゃんになつたわけではなく、アレス

自身がそうする必要を感じたからである。

ぼろぼろになった元客車を後ろにして、コウコがこちらに剣を向けている。

その目を大きく見開き、瞳を爛々と輝かせて。

「まるで百年の仇を見るような目なんですけど」

アレスは言った。

それに対しての答えは無い。その代わりに、離れていく足音が聞こえてきた。

オレもそつちの立場に立ちたいよなあ。

ゆっくりと近づいてくるコウコを見ながら、アレスは、巻き添えにならないように離れた自称「伴侶」を羨ましく思った。

ぎりぎり間合いの外で足を止めたコウコは、次の瞬間、思い切りよくアレスの懐へと飛び込んできた。しかし、それはいささか不意な飛び込みだったと言える。アレスは、それだけで、コウコの意識が集中を欠いていることを悟った。自分を見ていない。

なるほど、ズーマもたまには役立つもんだ！

コウコの剣はそれでも凡百の剣士相手であれば、十分に通用するものであったが、それは魔王と称される者を斬り伏せた勇者相手には全く通用するところではなかった。

荒々しく振り下ろされた剣をアレスは軽々と受け止めた。

剣は心で振る。

心が乱れれば、剣も軽くなる道理である。

チャンスは今しかない！ そう思いながらも、アレスは心を逸らせなかった。その辺のトレーニングはいやというほど積んでいる。

コウコと体を入れ替えるようにして、彼女の刀をいなしたアレスは、そのスムーズな動きに体勢を崩した少女の首筋に剣先を突きつけるようにした。無駄のない美しい動きである。

「潔い女の子だよな、お前は。コウコ」

彼女の横顔を見るような立ち位置からアレスが言った。

コウコは答えの代わりに、持っていた刀の先を地に刺した。

## 第10話「戦闘終了後のストレス」

戦闘終了。

無傷で女の子を制した。

普通であれば何の自慢にもならない一件だが、こと相手がコウコであれば奇跡的な首尾と言ってよい。

アレスは満足した。

そうして、この成功が相棒の微妙極まるサポートのおかげであるということは分かっていたが、絶対礼なんて言わねえ、と心に決めた。相手はそんなことを求めるわけないことを知っていたし、第一、癩しやくに障さわる。

「斬らないの？」

コウコがアレスの方を見ずに、そのままの状態で言う。

平静な口調である。

アレスはイラツとした。斬る気があれば、初めからやっている。

それを見越して皮肉ったわけでもないコウコの鈍感さがアレスには不満だった。

その不満を無理やり押さえる格好で、アレスは少女になにゆえかつての仲間 もっともこれは勝手に自分が「仲間」と思っているだけで、コウコはそう思っていないかもしれないという可能性もあるので、念のため問い質たしてみたところ、コウコからは、「仲間だったよ、あの時は」という答えが返って来てアレスは欲しかった答えを得たにも関わらず微妙な気持ちになった を殺しに来たのか、本当のところを聞きたいと尋ねた。

「アンシとの結婚を阻止するためと言ったわ」

コウコは依然、アレスと顔を向き合わせずに言った。

「それを信じろって言うのか」

「別に言っていない。信じるかどうかはそっちの勝手」

「王の命に逆らうことになる」

「平民の反乱を収めたのに、その平民階級の人間が次代の王になつたら意味がない」

「オレはアンシと結婚する気なんかないし、王になる気もない」

「アレスの気持ちなんか関係ない」

つれない言い方であるが、そういう意図があつたわけではないことに、アレスは気がついた。コウコは単なる事実を言ったのみである。王の意志は国の意志であり、アレスがどういう気持ちを持っていても、通常であればそれはクシャッと押しつぶされて、ポイッとゴミ箱の中に捨てられてしまうだろう。そんなことに今気がついたアレスは、愕然がくぜんとした。

「……誰に依頼されたんだよ？」

「『誰に依頼したんだよ』と訊くべきだわ」

アレスは絶句した。

それに合わせてコウコモ口を閉ざす。

コウコが言ったことを理解できなかったのは……というより理解したくなかったのはほんの一瞬のことであり、すぐに彼女の言うことを受け止めることができる自分の冷静さを、アレスはうとましく思った。

「……お前の考えだつていいのか？」

「全てはヴァレンスのため」

「……ああああああ！ クソっ！」

アレスは、剣を持ってない方の手で頭をぐしゃぐしゃした。

冷静であることと、感情をぶちまけることは矛盾しない。むしろアレスの場合は、適度に感情をあらわにすることによって、冷静を保っているとも言える。アレスはけて世の中を達観しているわけでもなければ、斜に構えているわけでもない。ただ、必要に迫られてクールであつただけである。その必要とは、主に一団のリーダーであることから来ていたわけだが、今はその立場にあるわけではない。それに冷静さが必要とされる戦闘状態も終わった。

だから、アレスは思い切りぶちまけた。

「何なんだよ、オレを殺すつてのは！　これまで一緒にやってきて、お前のこと信用してたのに！　信頼できるヤツだって思ってた！　それなのにこの仕打ちはなんだよ！　クソヤロウ！　あああー、ムカつくつ！　クソが！　これまでやってきたこと、別にお前らのためなんかじゃねーけどな、だからつて！」

戦闘中に全く乱れなかった呼吸をはあはあとさせたアレスは、大きく深呼吸した。

そうして、随分とズームを楽しませてしまったことをすぐに後悔した。銀髪の青年はアレスの後方にいるので、顔は分からないが、絶対にいらつくニヤケ面をしているに違いないとアレスは思った。

「悪いとは思ってるわ。本当よ」

コウコが言う。

「あー、そうかよ！　そりゃ、良かった。ちよつと黙ってる！」

アレスは、今この瞬間心の底から会いたい人がいて、そういう人がいることの幸運と、今すぐに会えない不運をかみしめた。ひどく苦い味がした。

アレスは続いて、ひとしきりコウコに思い切り思いの丈をぶちまけたあと、

「スタッフオロンに刺客を送ったんだな？」

現実に戻った。

コウコは、グラディ卿が手配したはずだ、と答えた。随分と口が軽くなっている彼女の状態は、潔い敗者の態度である。

グラディ卿は、ヴァレンスの朝政ちやくせいに参与する大臣の一人である。

「それで、お前がグラディ卿に提案したんだな？」

「ええ」

「あいつらも花婿候補なのか？」

「強い力を持った者は脅威になるから」

なるほど、こちらはズームの言った通りだというわけである。

随分簡単に人を殺そうとするもんだ、とアレスは皮肉な気持ちで考えた。皮肉な気持ちでものを考えるということは、思考がまだ冷

静に戻り切っていないというそのことである。

「でも冷静になれって方が無理だろ？ なあ？」

アレスの問いに、

「そう思うわ」

コウコは素直に答えた。

## 第11話「新たな戦いからのラブコール」

アレスにとつては、戦っている最中も十分なストレスであったが、戦闘後の方がよっぽどストレスフルな事態だった。とりあえずコウコを制したものの、問題が解決したわけでは全然無い。王の意志を曲げるといのが、ヴァレンス高官グレイ卿の決定だとすれば、とりあえず第一の刺客コウコを退けたとしても、第二第三の刺客をぞくぞくと送ってくるに違いない。いと楽しきかな。

「オレ、今、唐突に分かったわ。魔王の気持ち」

アレスは、自分の倒した宿敵の気持ちを読み取るという得難い<sup>えがた</sup>経験をしたが、特に有りがたいとは思わなかった。

アレスは数回、大きく深呼吸をした。心を落ち着けようとしたわけだが、大した効果は無かった。

王都ルゼリアには帰れない。

それだけははっきりとしている。

今から為すべきことは、スタッフオロンへ帰り、手負いの仲間の安全を確保することである。

それもはっきりとしている。

しかし、その後どうするか。それが不分明である。先に先に物事を考えるのは、アレスの癖。

苦勞性だなあ、オレ。

目前の出来事にだけ集中して生きていければ楽であるが、どうやらアレスはそのような明快さだけで生きていくには少々複雑にできているようだった。

「……要はオレが王女に復命しなければいい話だな」

アレスは自分に向かって問いかけるような口調で言った。

「どうということ？」

コウコが訊き返す。

「オレが王都に帰らなければ結婚話は立ち消えになるだろう。……」



ただ帰らないだけじゃない。いつそ、他国にでも行けばいい。『勇者は魔王を倒したあと、いずこかへと去っていきました』ってな。よくあるエンディングだ」

「……………」

「アホみたいな終わり方だが。同胞どうじんと殺し合うよりはマシか。あいづらも全員、ヴァレンスから出す……国から出た人間を更に襲うようなことはしないだろう……しないよな、多分」

「本気なの？」

「お前は本気じゃなかったのか。もしかして」

アレスの言葉に、コウコは押し黙った。

もしも本気でコウコがアレスを殺す気だったら悠長に挨拶などしないだろうし、初めから呪文を使っていたことだろう。ただし、彼女の剣には殺気が確実にあったわけで、剣を向ければ殺す気でやれるのがコウコという少女だった。

「一つ言っておくことがある」

アレスは、コウコにこちらを向くように言った。

剣はまだ突きつけている。

コウコがアレスを見る。

「もしも、スタフォロンにいる仲間の身にもうすでに何か起こってたら、オレはお前とグラディ卿を絶対に許さない。オレの全ての力をお前たちに向ける」

これは脅迫ではなく、誓約だった。アレスは地の神に対して誓いを立てたのである。

隣にズーマが現れるのをアレスは横目で見た。もう安全になったと思って近づいてきたのではない。もう一幕が降りたのだと思って近づいてきたのである。

「役者への声援はどうした？」

アレスが言うと、ズーマはおざなりな拍手をした。

「スタフォロンに戻るぞ、ズーマ」

「愉快痛快だな。しかし、酒が飲めなくなったのは痛い」

「酒？」

「ルゼリアでの『勇者を囲む宴』的なパーティーで鯨飲げいりんしようとはそれは楽しみにしていたのだがな」

「お前の楽しみが少しでも減るのがオレの楽しみだよ」

アレスはコウコと距離を取るようにはしてから、剣を背中の鞆に納めると、馬の様子を見に行った。怪我などは無いようである。

アレスは客車から二頭の馬を放すと、一頭をズーマに預けた。

そうして、がれきと化した客車を見て、街道の通行の邪魔になることこの上ないが今は片付けていけないことを、ここを通るであろう旅人たちにすまなく思った。

「アレス！」

コウコが大きな声を上げたので、馬に乗ろうとしていたアレスはびっくりした。

「なんだよ。リターンマッチとかしないからな」

「刀を拾っても？」

律儀なことを言う少女に、アレスは、「どうぞ」と丁寧に言った。

「もうあなたに危害は加えない。わたしは負けたんだから」

そう言いながら、コウコは地に突き立っている自分の剣を取って、鞆におさめた。

その声がどこか言い訳めいて聞こえるのは自分のうぬぼれだろうか、とアレスは思った。

「わたしも行くわ」

馬にひらりと飛び乗ったアレスに、コウコが声をかけた。

「何をしに？」

「国を出るのを見届ける」

「花一輪だな」

同じように馬に乗ったズーマがニヤリとして言った。

「念の入ったことだなあ。でも、断る。暗殺者と一緒に旅するつもりはないね」

アレスは同行を断ったが、

「じゃあ、勝手にについて行く」

そう言って、自分の馬の方へとさっさと向かうコウコ。

アレスは、ズーマがさらにニヤニヤするのを見てしまって、げん  
なりした。

そうして、目の保養をするために、空を見た。

依然として美しい青空である。

アレスは、ズーマに、「行くぞ」と短く声をかけた。

馬を走らせる。そうして、ここまで来た道を逆にたどり始めた。  
新たな戦いからラブコールを送られる格好で。

## 第12話「門番は退屈なお仕事」

ピューツという鋭い鳥の鳴き声が、今にも泣き出しそうな曇り空を引き裂いた。

引き裂かれた空の下に、ヴァレンス王都ルゼリアがある。

玉の都にふさわしからぬいささかくたびれた佇まいで。

無理もない。

ほんの十日前まで、反乱軍とバチバチやりあっていたのである。

反乱軍の猛攻のおかげで、ルゼリアは、やんちゃざかりの子どもがいる家のリビングのような何とも荒れたありさまとなり、そちこちで補修作業が行われていた。トンテンカンテンという槌つちの音が、それを振るう市民の荒い息づかいとともに、街中から上がっている。

その街を北に上がり切ったところに、ルゼリアの王宮がある。北はヴァレンス国では聖なる方位であり、街の重要施設はもっぱら北に作られる。王宮は、ヴァレンス王と王女の御身を守るために何重もの門で守られており、その門自体をさらに兵士が番をして守っている。

その門番の一人であるニツカは、第二番目の門を背にし、ふああーと大きなあくびをかみ殺そうとして失敗した。

「……つまんねー役目だ」

ニツカは不満げな声を出した。まだ二十歳そこそこの青年である。今発した言葉通りの気分でニツカはいた。ひねもす門前に立つて、不審者が来ないかどうか確かめるなどというのは、およそ大丈夫たる自分のなすべきことではない。そんな風に彼は感じていた。

仮にこれが戦時だったら、話は別である。いつ何時なんどき、門を破らんと猛然と突っ込んでくる敵がいるか知れず、その緊張感に身を震わせ、そうしていざ向かってきた敵に対しては敢然と立ち向かい、それをちぎっては投げちぎっては投げするところを、都の乙女に華々しく披露することもできよう。だが、残念ながらそういう機会は、

十日前に反乱軍が退却したことをもって失われてしまったのだ。もちろん、反乱が完全に終結したとはいえない。散った反乱軍は残党となり、その残党狩りがこれから行われることだろう。国内が落ち着くにはまだ時がかかり、とはいえしかし、とりあえずの平和を手に入れたことには違いなく、そうしてそういう状況が、

「おれが活躍できないということの意味するんだなあ」

にやり、とニヒルな笑みを浮かべる門番の青年の姿に結実するというわけである。

ニツカは反乱中は一兵卒として城門を守っていた。それが、反乱後に王宮の門の警備に当てられたのは、彼自身は自分の働きがある程度 というのも、ちゃんとした査定ならば王女の御身周りの警備に当てられてもよいとニツカは自負していた。認められたせいだと思っていたが、実状は単なる人員不足であった。反乱で怪我をせず満足に動けそうな兵士の中から適当にチョイスされたのである。

ニツカは、腰に佩いた軍刀をしゅたつと抜いて、構えてみせた。そうして、せいやつとかけ声を出しながら振ってみる。

「ふっ、またつまらぬものを斬ってしまった……」

斬り倒した想像上の侵入者に対して悠然とした微笑を与えるニツカ。その類には少しにきびがある。

続いてニツカは目をきらりと光らせると、剣を振って、虚空に鋼の線を描いた。そのアーティスティックな出来にニツカは自分で感心した。これならば、人はおろか、地上で最強の肉食獣リーグル、あるいは伝説上の生物である竜だって斬れるに違いない。

「おれも魔王討伐チームに加われてさえいたらなあ」

そうすれば、きっと自分が魔王を倒していたことだろう。聞くところによると、魔王クヌプスを討つたのはまだ十四、五の小僧っ子ということであり、そんな鼻たれにできることなら、

「おれにできないはずがない！」

と対魔王バトルの凄惨な死闘をちよつとでも想像することさえせずに鼻息を荒くするニツカは、控えめに言っても世間知らずの阿呆

であつた。

「それにしても遅えな。ヨーク」

軍刀を鞘に納めたニツカは、ペツと唾を吐きだすようにつぶやいた。

この門を守っているもう一人の門番の名前である。

そのヨークが、

「ちよつと野暮用があつておれ少し抜けるから、ひとりで頼まあ、ニツカ」

と仕事中に自主的な休憩時間を設けていなくなつてから、もう大分時間が経つ。野暮用とは、宮中に仕える女官に会いに行くことだ。いい仲であるらしい。そうやって、ヨークはしばしば門番の任務をサボる。ニツカは、全く嘆かわしいことだなあと自分のやる気の無さを棚に上げながら思っていたが、ちよつと羨ましいと思う気持ちもあつた。彼は常に恋人募集中である。

サボりがちな相棒の件を上官に言いつけてやつても全く心痛むところではないが、彼の代わりに気の合わないヤツが配属されたらと思うと、それもそれで面倒くさい。ヨークは、サボりがちでちよつと嫌みつたらしく時々恋人とのノロケ話をするところ以外はまあまあいいやつである。

「まあ、それにあいつがサボつても誰も困るわけじゃないのは確かだしなあ」

どうせ誰も来ないのである。

その認識が間違いであるということに気づく時がすぐその曲がり角まで迫っていたことを、そのときの彼はもちろん知る由もなかつた。

### 第13話「宮中に遊びに行こう」

ニツカが守る門を通り抜けるのは、貴族のお偉がたに限られる。それもそのはず、この門を通るということは、王あるいはその代理である王女に謁見するということの意味しているからである。というわけで、門番であるニツカが当門辺りで見ると人間と言え、高慢が服を着て歩いている貴族か、同僚の宮中警備兵に限られるわけである。

そんなところに、カジュアルな服を着た市民風の娘が歩いて来たのだから、ニツカは驚きを通り越して、呆気にとられてしまった。

ニツカと同じくらい、二十歳くらいの娘である。まるで休日の街路を行くかのように軽やかに歩いてくる彼女はニツカの前まで来ると、春風の精のような優しげな面立ちを見せて、いよいよ彼をぼつとさせた。淡い金色の髪が滝のように腰まで流れていて、まるでそれ自身が光を発しているかのように、薄曇りの空の下で輝いている。

「こんにちは」

と言った彼女の声が、どこか遠くの方から響いてくるかのようにニツカには感じられた。

ニツカは、頭を振った。

門番としての職務を思い出し、「しっかりしなくては！」とか思ったわけではなく、単なる反射的な行動である。人間には現実にとどまろうとする本能がある。

頭を振って、引きずり込まれそうだった夢の世界から戻ってきたニツカは、ここで何をしているのか、彼女は誰なのか、問い質した。口調は強くない。もしかしたら貴族の子女という可能性もあるし、なにより美人である。美人に強い口調で対応できない自分をニツカは恥ずかしく思っていない。しようがないのだ、と開き直っている。「アンシに会いに来ました。通らせていただきますね」

娘は、にこりと魅力的に微笑んで、再びニツカの頭をくらくらさせる、彼の横を通り過ぎて、門へと向かった。

アンシがヴァレンス王女の御名みなであることは、既に述べた。王女を呼び捨てにして堂々とするなんてなんて子だろうと、と驚いたニツカだったが、やる気は無いにしても自分の仕事を忘れておらず、またそれ以上に、

こんな可愛い子と話したら、ヨークのヤツに自慢できるぜ。

という思いもあり、もしかしてもしかしたらお近づきになれるかもしれないぞ、という下心まる出しの考えでもって、

「君、ちよつと！」

たおやかな後ろ姿に声をかけた。

「はい？　なんででしょうか？」

振り返った彼女はやはり笑顔である。

思わずほんわかして弛緩した頬を、ニツカはあわててキリリとさせようとした。しかし、あまり成功はしなかった。

「ここからは関係者以外立ち入り禁止ですよ」

ニツカが言うと、

「わたしは関係者です」

即答が返ってきた。

ニツカは、やはり貴族だったのか、と違ってひやりとした。そうして、それ以上にがっかりした。貴族の子女だとしたら、平民であるニツカが手の届かせようの無い高嶺たかねの花ということになり、お知り合いになるチャンスなど皆無ということになる。短い夢だった、とニツカはがつくりした。そうして、どの家の貴族の方なのかを、慣れない敬語で尋ねた。

次の瞬間、ニツカの夢は再び立ち現われた。

「わたしは貴族ではありません。平民です」

娘が言う。

絶望の淵に沈んでいたニツカは、希望の岸へと這はい上がることができて喜んだが、喜んでばかりもいられないということにさすがに



気がついた。貴族でないとするとどうしてこの宮門を抜けようとしているのか、というかそもそもどうやってここまで来たのか。

「お友達であるアンシに会いに来たんです。どうやってここまで来たのかというと、がんばって来ました」

「いや……お友達って言われても。それに、がんばって……」  
ツッコミどころ満載の答えに、ニツカは呆れた。

まるで子どもが遠くの友だちの家に遊びに来たかのような風情である。

「門、開けていただけですか？」

小首をちよつと傾げるような仕草が可愛らしくて、つい「はい、ただ今すぐに」と言いそうになってしまったニツカは、そう言うのをどうにかこうにかすんでの所で押しとどめた自分のプロフェッショナルを誇らしく思った。

お願いが拒否された娘はニコニコしたまま、くるりとニツカに背を見せて門の前まで歩いて行った。ニツカが一瞬遅れてその後を追う。

何をする気なのかと不審に思うニツカの前で、娘は、コンコンと門をノックした。

「いや、そんなことしても開くわけないからね」

もしかしてこの子は頭がちよつと普通と違って独特な子なのだろうか、とニツカは考えた。

「いや、だとしてもここまでどうやって……？」

ヒュンヒュンヒュンと、何かが風を切る音が聞こえてきた。

ニツカはびっくりした。

いつの間にか、娘の手がロープのようなものを回している。そのロープの先には鋼色の何かがついていて、それを回す娘の手はまるで車輪を装着しているように見えた。

「えいつ」

気楽な感じのかけ声とともにロープの先が空に上がり、門の上にガキツと引っかかった。

そのロープを娘は、扉を足場にしてタッタツと上り始めた。  
ニツカは、なるほど、と膝を打った。  
彼女がどうやってここまで来たか理解できたのである。

## 第14話「侵入堂々」

人の背で三人分くらいの高さを、娘はまたたくまにロープを伝って上って行く。ロープを手に門扉もんびを蹴るようにしてサササツと上がっていく彼女は、その優しげな容姿とは対極の機敏さを醸かもし出していた。

「侵入者……ってことだよな、あの子」

娘の敏捷性と、彼女の着ているワンピースの裾からチラ見える下着に見惚れていたニツカがそのことに気がついたときにはすでに彼女の姿は門の上に消えていた。ロープはそのままにされている。

ニツカはロープをギュツと握ってから引いてみた。ロープの先には鉤状かぎのものがつけられているのである。その鉤が門の上をしっかりとつかんでいるようである。ニツカは、うむ、とうなずくとロープから手を放し、その手を腰に装着されていた法螺貝ほらへと移した。そうして手に取ったそれを口元に持っていき、ぶおおーんと吹いた。門を開けるといふ合図である。

合図に応じて、門はゆっくりと左右に開いていく。なぜ門を開けるのか、誰が来たのかということを確認もしない門の向こう側のその怠惰さはニツカの職業的勤勉さを全く刺激しなかった。それに今はその方がありがたい。

ん？ でも、なんでありがたいんだ？

開いた門から中に入ったニツカは、そもそもなにゆえ自分が門内に入ったのかということを数秒の間熟考したのち、それを奇妙な娘に対する好奇心からだと言論づけてから、一瞬後慌てて、

「いや、侵入者を捕えるためだよ、もちろん！」  
と考え直した。

「おい、止まれ！」

内部に入ったニツカは、荒い声を聞いて、びくっとしたけれど、それは彼に対して向けられたものではなかった。

内側から門を開けた兵士が、魔法のように現れた娘に気がつき、静止させようとしたのである。門の上からどうやって地面に降りたのか分からないけれど、とにかくニツカは娘の姿を確認した。

兵士たちがパラパラと集まり、あつという間に彼女は囲まれた。ぞんざいに門を開ける輩たちにしては、なかなか手際がいい。

娘は大の男たちに包围されていても、全く怯えた様子を見せない。やつぱりちよつと頭がユニークな感じなのかなあ、と思いつながらその包围網に駆けつけるニツカを見て、開門部隊の隊長は、

「なぜ門を開けさせた？」

と今さらなことを訊いてきた。

どうやらタイミングが良すぎたせいか、門が開いたせいで娘が入って来たのだと、誤解しているらしいことにニツカは気がついた。なぜ門を開けるのか訊きもしなかつたくせにそれは無いだろうと、ニツカは醜い責任のなすりつけ合いに応じる格好を取った。

そもそも別におれのせいじゃねえし。その人が勝手に入ったんだし。

しかし、勝手に門内に入る人間を止めることはニツカの職務であるわけなので、彼の主張は当を得ていないことは言うまでもない。

開門隊長はチツと舌打ちするとニツカの責任追及は後にしようと思っただのか、侵入者の方に顔を向けた。

「で、何者だ？」

隊長は、部下四名に包围させた娘に対して、高圧的な口調で言った。

四名の部下たちはみな抜刀してはいないものの、いつでもそうできるように身構えている。

そんな危険な雰囲気の中、

「わたしはアンシのお友達です」

娘はニツカに対してさつきしたのと同じほんわかした答えを返した。

「連行しろ」

隊長は、にべもなく命令した。

それに応じて、部下の一人が率先して、娘の腕を取ろうとした。ちきしょう、あのスケベヤロウ、とニツカが見当違いのことを思った瞬間、その兵士の体が横方向にくるつと四分の一回転して、パタンと地面に倒れた。

「な、なにをするかつ！」

と隊長が声を上げるまで少し時間がかかった。というのも、本当にそれが娘のしたことなのかどうか確信が持てなかったからである。ニツカにも分からなかった。娘は微動だにしていなかったように見えた。とはいえ、人間が前方とか後方に倒れるならともかく、横方向に自然に倒れることはありえないし、しかもどう見てもどこかから力が加えられたような強制的な回転であったので、部下に対し娘が何かをしたのだという隊長の判断をニツカも支持した。

娘は隊長の問いに答えず、倒れた兵士に向かって、すつと手を差し伸べた。

その可憐な顔には柔らかな微笑が湛<sup>た</sup>えられている。

それを見た兵士は倒れたままの状態でちよつと頬を染めた。よっぽどその手を取りたいだろう、とニツカは思ったけれど、侵入者に助け起こされるような醜態を演じるわけにはいかない兵士は、もちろん自力で立ち上がった。ダメージは無いらしい。

「道を開けてくださいませんか。そうしないと、この方のようにみなさん地面に転ぶことになりますよ」

娘が、まるで子どもに言い聞かせるような優しい声で言う。

隊長は自分の考えが妥当であったことが分かって、しかし、ホツとするわけにはいかない立場である。

「貴様、抵抗する気かつ！」

聞かずもがなのことを隊長は言った。何かしら言わないと格好がつかないと思っっているのだろう、とニツカは思った。

「みなさんが何もしなければ、わたしも何もしませんよ」

娘の答えに、

「全員、拔刀ばつとう！」  
隊長の命令の音が重なった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0596ba/>

---

大乱やみてのち、残念な少女たちのふる剣

2012年1月14日13時52分発行